

能楽堂とは
能を上演する専用の舞台を能舞台といい、四本の柱に囲まれた三間（約6m）四方の本舞台を中心として、右側に地謡座、正面奥に後座と松の描かれた鏡板をもち、左側に長さ四間ほどの橋掛りを備えた独特な形をしています。

この能舞台は元々屋外にあり、野天の白州や対面する建物が客席になっていましたが、明治以降、屋根付きの舞台と付随する楽屋、客席ごと建物に収容され、能楽堂と呼ばれるようになりました。

昔ながらの屋外舞台も全国に数十カ所現存しています。

【チケット料金】(税込) **全席指定**

◆ S席・・・8,000円 ◆ B席・・・5,000円
◆ A席・・・6,000円 ◆ C席・・・4,000円

※各座席区分は前ページ座席表をご参照下さい。
※本公演は未就学児のご入場をご遠慮頂いております。

【チケット発売開始日】
4月20日(金) 午前10時より

【チケット取り扱い】 ※販売は下記に限り承ります。

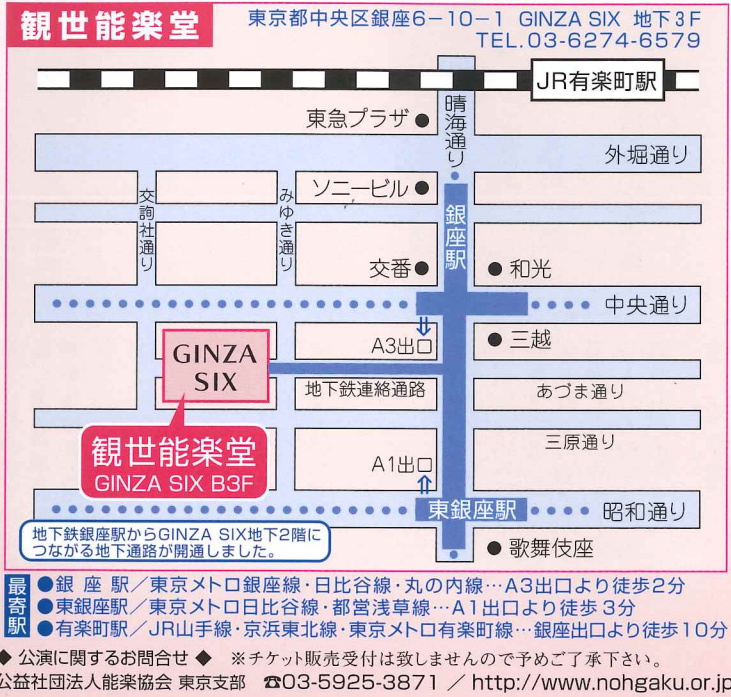
◆ 電話
チケットスペース ▶ 03-3234-9999 (有人対応)

◆ インターネット
e+イプラス ▶ <http://eplus.jp/> (PC・携帯共通)

◆ 店頭
e+イプラス ▶ ファミリーマート全国各店舗 店内 famiポート

【前売チケット発売期間】
4月20日(金)～7月16日(月)

○チケットスペースのみ7月13日(金)に終了致します。
○前売チケットは販売期間終了前に完売することもございます。予めご了承下さい。



能観世流「西行桜」素囃子 梅若実

ユネスコによる
人類の無形文化遺産「能楽」

納涼能

第四十一回

能観世流「西行桜」素囃子 梅若実

平成30年7月20日(金)
開場/午後1時 開演/午後2時

会場 観世能楽堂
主催/公益社団法人能楽協会 東京支部

撮影「西行桜」吉越 研 / 「船弁慶」越井清一郎

御挨拶

納涼能には日頃からご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。
昨年は第四十回記念公演として開催致しました所、大変ご好評を頂き有難うございました。
今回は新装成りました銀座の観世能楽堂で、シテ方五流総出演はもとより、本格的な能楽公演として企画致しました。
皆様のご来場を心よりお待ちしております。

東京支部長 朝倉 俊樹

番組

（開演午後二時）

ミニ講座 安福 光雄

能（観世流）

西行桜

シテ（老桜ノ精）梅若 実

ワキ（西行法師）森 常好
 ワキツレ（花見人）森 常太郎
 ワキツレ（〃）館田 善博
 ワキツレ（〃）野口 琢弘
 ワキツレ（〃）野口 能弘
 アイ（能力）野村 萬斎

大鼓 亀井 広忠 太鼓 小寺 佐七
 小鼓 観世新九郎 笛 寺井久八郎

後見 山崎 正道
 観世 恭秀

地謡 佐久間二郎 梅若 紀彰
 梅若 泰志 岡 久広
 遠田 修 武田 志房
 清水 寛二 中島志津夫

狂言（大蔵流）

鳴子遣子

シテ（茶屋）大蔵彌右衛門

アド（遊山人）大蔵彌太郎
アド（遊山人）大蔵 基誠

後見 吉田 信海

休憩 二十分

（四時五分頃）

仕舞（金剛流）

加 茂

金剛 永謹

地謡

工藤 寛
坂本立津朗
今井 清隆
元吉 正巳

仕舞（宝生流）

田 村

宝生 和英

地謡

野月 聡
今井 泰行
金森 秀祥
小倉健太郎

仕舞（喜多流）

玉 葛

塩津 哲生

地謡

塩津 圭介
狩野 了一
長島 茂
大島 輝久

能（金春流）

子方（源義経）金春 初音
後シテ（平知盛ノ靈）金春 憲和
前シテ（静御前）

船弁慶

ワキツレ（義経ノ從者）矢野 昌平
 ワキ（武藏坊弁慶）福王 和幸
 遊女ノ舞 ワキツレ（義経ノ從者）村瀬 慧
 アイ（船頭）三宅 右矩

大鼓 柿原 光博 太鼓 桜井 均
 小鼓 森澤 勇司 笛 藤田朝太郎

後見 本田 光洋
 辻井 八郎

地謡 中村 昌弘 山中 一馬
 井上 貴覚 金春 安明
 本田 芳樹 高橋 忍
 政木 哲司 山井 綱雄

附 祝 言

（終演予定 五時四十五分）

お願い

・場内での撮影・録音・録画は固くお断り致します。
 ・場内では携帯電話の電源・時計のアラーム等をお切り下さいますようお願い致します。
 ・出演者はやむを得ぬ事情により変更させて頂く場合がございます。予めご了承下さい。

能 西行桜

花の名所を尋ね廻る下京辺の人々が、西山西行の庵室を訪れ花見を申し出ます。老木の桜を愛し、花も一木、我も一人と言ひ花見を断ろうと思いましたが、運々の花見の方々を見せずに還す事も出来ず内へ入れます。西行は、浮世を厭う山住を乱された煩わしさに「花見んと群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜の科にはありける」と吟じ睡ります。

夜も更け老木の桜の精が白髪の人となり、西行の詠歌の意を尋ねん為に現れたと伝えます。桜の精は、花の名所を讀み舞奏でます。時至り夢覚め花のみ散り敷き、桜の精の姿は消え失せます。

本日の「素囃子」とは序之舞の部分に彩色と言う特殊演出が入るものです。

狂言 鳴子遣子

野遊山に出かけた二人の男が景色を眺めるうちに、山田にかかる鳴子をみかけて「鳴子」と呼ぶか「遣る子」と呼ぶかの論争になります。茶屋の主人はその判定を頼まれますが……

仕舞 加茂

加茂の社で、播磨の神職の前に表れた神の化身である女性二人が、加茂の三社の神のいわれを語って消えます。仕舞は後の場面で、別雷神が現れて、神威を示し、雷鳴とともに風を起し雨を降らせて五穀成就の誓いを示します。そして御祖神は糺の森へ、自らは天上に消え失せる様等を豪快な型で見せます。

仕舞 田村

旅僧が京都清水寺で花守の童子に出会い寺の米屋を聞く、童子は坂上田村丸のゆかりの寺である事を語り、名所の景色を讀み、田村堂に入つて行きます。やがて、僧が弔いをしていくと、武者姿の田村丸の霊が現れ、鈴鹿山の賊との戦いの有様を見せます。

仕舞 玉葛

旅の僧が長谷観音へ参詣に行く途中、女に出会います。女は「源氏物語」の玉葛の霊だと言ひ姿を消します。僧が弔いをする、玉葛の霊が髪を振り乱した姿で現れ、死後も妄執の苦しみから抜け出せないと打ち明けますが、やがて懺悔し成仏します。

能 船弁慶

壇ノ浦の戦い以降、兄の頼朝と不和となった源義経は、弁慶を従えて西国へと向かいます。途中の大物の浦で、義経を慕ってきた静御前を論し、泣く泣く都へと帰ります。さらに船を手配し海上に出ると、にわかには天候が荒れ始め、荒れ狂う波間から、かつて海に沈んだはずの平知盛をはじめとする平家の一門が現れ一行に襲いかかります。長刀を駆使する知盛に弁慶は一心に数珠をもみ経を唱えると、白波を残して退散するのです。

今回は前段では「遊女ノ舞」という小書（特殊演出）で、舞の途中で橋掛りに行き、静の別れの悲しさを際立たせ、後場では「替ノ出」の小書により、知盛の登場が緊迫感を与える演出となります。船頭役の間狂言の活躍も見逃せない見どころ満載の演目です。